“MY TOWN”うぉっちんぐ

歩き目デス&足ラテス

Vol.84

ある銭湯のアーカイブズ

〈旧保内町・清水湯〉

岡崎　直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

湯の雰囲気を想い出したくなった。

この銭湯が無くなったのはいつだったろう。旧保内町にあった清水湯。小さいながらも味わい深く、存在感のある町の銭湯だった。手元の記録を調べると、解体されたのが平成12年の3月末だからもう20年近く前になる。きっと人々の記憶からも消えつつあるに違いない。少し振り返ってみよう。

丸い煉瓦煙突が地域のランドマークで、宮内川沿いに姿を映すレトロ銭湯。創業は中岡善四郎氏により昭和11年だから、結局64年間の営業だった事になる。写真手前に橋の欄干が写っているが、これも同年の架橋だった清水橋。この界隈の町ガイドをする際には、よく「あの二・二六事件の翌月に完成した橋で、目の前の清水湯も同じ頃の開業。」などと案内していた頃が懐かしい。川をはさんで芝居小屋大黒座（平成2年解体）もあり、近くに今も残る湧き水箇所が町名（清水町）や銭湯名になったエピソードなど、当初は一連のガイドコースとしてその解説に熱を帯びるエリアだった。

宮内川　清水橋ごしに清水湯を見る

最近は町の銭湯をすっかり見かけなくなってしまった。どこも所謂（いわゆる）スーパー銭湯や公営の温浴施設ばかりとなり、それはそれで人気なんだが、あの懐かしい銭

昭和初期か大正期か、ボイラー釜

また、この銭湯には煉瓦積みで囲われた年代物のボイラー釜があり、それは開業時に武内木蝋工場で使用されていたものを転用して営業が始まったという歴史物件でもあった。きっと県内現役最古、と言っても過言ではないシロモノだった。保内は木蝋で栄えた史実もあって、そのハゼの実を絞った残りのガラはボイラーを焚く燃料にうってつけという地の利もあった。

町田忍氏と円形浴槽を見る参加者

町田忍氏の番台講演

廃業から解体に至る当時、「保内大学」というまちづくり活動の一環で、せめてもの事「清水湯お別れ見学会」を実施することに。銭湯文化研究家の町田忍氏をお招きし、番台に座って講演をして頂いた。

元敷島湯にあったレトロ看板の再利用（町で保存）

まだブレーク前の氏だったが、流石に全国の銭湯を巡って入っておられる方だけに、ナンとその座った番台の高さが「全国で一番低いんじゃないか。」と驚かれていた。通常は男湯、女湯の目隠しの意味もあって高くする所、「ナゼここは低いのだろう」と。やはり現場を多く踏んでいる人の言う事は違うと感心もしたし、解体間近だった事もあってレアで新たな価値を聞かされ、当惑もした。結局ナゾはそのまま残ったが。

ブレーク前と言えば、この銭湯にはあの全国デビュー前の芸人友近も入っている。民放番組の取材で、既に水の無い浴槽にバスタオル1枚で入り体当たりレポート、インパクトのあるシーンの番組となっていた。其の後の人気を見れば、ここは縁起のいい銭湯だったのかも知れない。

中央に円形浴槽。こうした配置は関西の特徴らしい

それから、シンボルだった煉瓦煙突は、通常の四角ではなく円形、このタイプは県内でもここと三瓶にあったのみ。今はどちらも存在しないが。他にも、入口の「男」「女」と振り分けられた扇形のレトロ看板は、元々八幡浜市の敷島湯から譲り受けたものとか。そうした様々なエピソードに事欠かない魅力的な銭湯だった。今も、湯船に浸かった際に、湯を通して伝わるボイラーのボコボコという振動が、身体の記憶として蘇る。

脱衣場に二つあった広告入り衝立（ついたて）の一つ（町で保存）